

様変わりする日中貿易

今井 理之 *Imai Satoshi*

愛知大学現代中国学部 教授
(財)国際貿易投資研究所 客員研究員

日中貿易は、1970年代末の改革・開放以来の中国経済の変化に対応して大きく変化してきている。双方が主要貿易相手国となったし、輸出入商品構成では1980年代の垂直型分業から1990年代の水平型分業へと様変わりしている。現在では日中両国の経済的相互依存関係は相当深化している。日中貿易の変化の背景には日本からの直接投資が大きな役割を果たしている。

中国のWTO加盟が2001年末に実現し、日中間の貿易・投資関係をさらに拡大する環境が整った。すでに日本の対中投資は再びブームの様相を呈しており、日本からの工場移転で日本の産業空洞化が懸念されるほどである。日本経済が長期に低迷する中で高い成長を続けている中国市場でのビジネスチャンス確保・拡大に向けた投資が多いが、内外の市場で競争力の低下した

企業がコスト削減による競争力向上を目指す投資も多い。対中輸入品の中には日本企業が中国で生産した製品が逆輸入されるものもあるし、日本以外の外資系企業の製品や競争力をつけてきた中国地場企業の製品の輸入も増えている。

以下では中国の70年代末の改革・開放以降の日中貿易について変化と特徴を明らかにし、若干の展望を試みる。

対中輸入に大きな変化

中国が改革・開放へと政策転換した1970年代末以来の20年余りの日中貿易の変化は極めて大きい。主な変化と特徴を挙げれば次のとおりである。

(1) 貿易の拡大と相互依存の深化

日中貿易は国交正常化した1972年

の輸出入額 11 億ドルから、中国が改革・開放に転換した 78 年の直後の 81 年に 104 億ドルと初めて 100 億ドルを超えた。91 年に 200 億ドルを上回り、2001 年に 892 億ドル達した。このように中国の改革・開放後の日中貿易は急拡大を遂げており、80 年代に年率 6.8 % (輸出 1.9 %、輸入 10.8 %)、90 年代に同 16.8 % (輸出 17.4 %、輸入 16.5 %) という高い伸び率となっている。

この結果、両国ともに相手国の貿易、経済にとって極めて重要な地位を占めるようになり、日中の経済的相互依存関係は深まっている。01 年のように日本の輸出入が前年比かなりの減少をみている中で、主要 20 カ国中輸出入ともに増加しているのは中国のみである。日本人の日常生活にかかわる衣、食関係の製品や家電製品から企業が使用する中間財、製品にいたるまで広範囲にわたっている。百円ショップに並んでいる製品の 9 割あるいはそれ以上が中国品で占められている。まさに『中国製品なしで生活できますか』(王曙光著)という状況が出現している。(表 1)

このことは双方の貿易統計上にも表れている。日本の貿易に占める中国の

比重は高まり、80 年の 3.5 % から 01 年に 11.8 % にまで高まっている (1 位の米国は 01 年で 24.5 %)。なかでも輸入の比重は 80 年の 3.1 % から 01 年の 16.5 % へと大幅に高まった。このため、日本の貿易相手国に占める中国の順位は、90 年代に入って急上昇し、01 年には 2 位 (輸出 2 位、輸入 2 位) となっている。01 年の製品輸入では中国からの輸入がはじめて米国を上回った。

他方で中国の貿易に占める対日貿易の比重は 78 年に 23.4 % で、日本は第 1 位であったが、80 年代に後退し、80 年代後半には香港と首位が入れ替わった。中国の原産地規則の改定という要因もあって 92 年以降、日本の地位は再び上昇に転じた。01 年では 17.2 % (対日輸入 17.6 %、対日輸出 16.9 %) となっている。貿易相手国としての順位も 93 年から輸出入額では再び日本が 1 位となっている。

(2) 日本の貿易収支赤字化と拡大

1980 年代半ばまで日本の黒字基調で推移した日中貿易は、80 年代後半から日本の赤字へと転換した。88 年の 3 億 8,300 万ドルから始まった日本の貿易赤字は、2001 年まで一貫し

表 1 日中貿易の推移

A. 日本側統計

| 年 | 対中国貿易 | | | 前年比増減率(%) | | 構成比(%) | |
|------|--------|--------|--------|-----------|------|--------|-----|
| | 輸出 | 輸入 | 総額 | 輸出 | 輸入 | 輸出 | 輸入 |
| 1978 | 30.49 | 20.30 | 50.79 | 10.19 | | | |
| 1979 | 36.99 | 29.55 | 66.54 | 7.44 | 21.3 | 45.6 | |
| 1980 | 50.78 | 43.23 | 94.01 | 7.55 | 37.3 | 46.3 | 3.9 |
| 1981 | 50.95 | 52.92 | 103.87 | 1.97 | 0.3 | 22.4 | 3.1 |
| 1982 | 35.10 | 53.52 | 88.62 | 18.42 | 31.1 | 1.1 | |
| 1983 | 49.12 | 50.87 | 99.99 | 1.75 | 39.9 | 5.0 | |
| 1984 | 72.12 | 59.58 | 131.75 | 12.59 | 46.8 | 17.1 | |
| 1985 | 124.77 | 64.83 | 189.60 | 59.94 | 73.0 | 8.8 | 7.5 |
| 1986 | 98.56 | 56.52 | 155.08 | 42.04 | 21.0 | 12.8 | 5.0 |
| 1987 | 82.50 | 74.01 | 156.51 | 8.49 | 16.3 | 30.9 | |
| 1988 | 94.76 | 98.59 | 193.35 | 3.83 | 14.9 | 33.2 | |
| 1989 | 85.16 | 111.46 | 196.62 | 26.30 | 10.1 | 13.1 | |
| 1990 | 61.30 | 120.54 | 181.84 | 59.24 | 28.0 | 8.1 | 3.1 |
| 1991 | 85.93 | 142.16 | 228.09 | 56.23 | 40.2 | 17.9 | 2.7 |
| 1992 | 119.49 | 169.53 | 289.02 | 50.04 | 39.1 | 19.3 | 3.5 |
| 1993 | 172.73 | 205.65 | 378.38 | 32.92 | 44.6 | 21.3 | 4.8 |
| 1994 | 186.82 | 275.66 | 462.48 | 88.84 | 8.2 | 34.0 | 4.7 |
| 1995 | 219.31 | 359.22 | 578.53 | 139.91 | 17.4 | 30.3 | 5.0 |
| 1996 | 218.06 | 403.70 | 621.76 | 185.64 | 0.6 | 12.4 | 5.3 |
| 1997 | 216.89 | 418.46 | 635.35 | 201.57 | 0.5 | 3.7 | 5.2 |
| 1998 | 201.05 | 470.85 | 580.90 | 169.80 | 7.3 | 11.4 | 5.2 |
| 1999 | 234.49 | 431.03 | 665.52 | 196.54 | 16.6 | 16.2 | 5.6 |
| 2000 | 303.38 | 551.16 | 854.55 | 247.78 | 29.4 | 27.9 | 6.3 |
| 2001 | 310.91 | 581.05 | 891.95 | 270.14 | 2.5 | 5.4 | 7.7 |

B. 中国側統計 (単位: 億ドル)

| 対日本貿易 | | |
|--------|--------|-------|
| 輸出 | 輸入 | バランス |
| 17.19 | 31.05 | 13.86 |
| 27.64 | 39.44 | 11.80 |
| 37.93 | 47.66 | 9.73 |
| 48.68 | 62.90 | 14.22 |
| 49.10 | 39.84 | 9.26 |
| 45.44 | 55.30 | 9.86 |
| 54.18 | 85.04 | 30.86 |
| 61.09 | 150.35 | 89.26 |
| 47.79 | 124.38 | 76.59 |
| 63.98 | 100.74 | 36.76 |
| 79.02 | 110.43 | 31.41 |
| 83.95 | 105.34 | 21.39 |
| 90.11 | 75.88 | 14.23 |
| 102.19 | 100.32 | 1.87 |
| 116.79 | 136.82 | 20.03 |
| 157.77 | 232.89 | 75.12 |
| 215.79 | 263.27 | 47.48 |
| 284.67 | 290.05 | 5.38 |
| 308.74 | 291.84 | 16.90 |
| 318.39 | 289.95 | 28.44 |
| 296.60 | 282.75 | 13.85 |
| 324.11 | 337.63 | 13.52 |
| 416.54 | 415.10 | 1.44 |
| 449.58 | 427.97 | 21.61 |

(注) 構成比は、日本の輸出・輸入総額に占める中国との輸出・輸入額の割合。
 (資料) 日本側統計は『外国貿易概況』各12月、『通商白書』。中国側統計は『中国統計年鑑』、『海關統計』。ただし、1980～86年は『中国商業外
 経統計資料』

て続いている。01年には270億ドルと過去最高を更新している。ただし、日本の対香港黒字は01年で219億ドルある。香港向けに輸出されたもののうちかなりの部分が中国に再輸出されている可能性があり、この部分を割り引いて考える必要がある。

米国の対中貿易赤字化は80年代半ばに始まり、90年代に急増するようになった。2000年に838億ドルに達し、対日赤字の813億ドルを上回った。2001年も同じ傾向が続いている。日本の対中赤字も日本企業の生産拠点移転と逆輸入の増加、その他外資系企業・中国現地企業製品の対日輸出の増加で、今後とも米国同様に増えていく可能性がある。

(3) 水平分業化の進展

輸出入商品構成、とくに輸入商品構成が大きく変化している。80年代までの日中貿易は日本の工業製品輸出、一次産品輸入という垂直分業型であったが、90年代に入ると輸出入とも工業製品という水平分業型に変わってきている（以下、構成比は特記ない限り金額ベース）。

対中輸出では工業製品が95%以上を占めていて20年来大きな変化はな

い。しかし、工業製品の内容では変化が見られる。対中輸出の比重が高まっているのが機械機器であり、80年の42.3%から2001年では54.9%を占めている。機械機器全体の比重増加は90年代に入ってからの日本企業の対中直接投資の増加とも関連がある。（表2、3）

対中輸入商品構成の変化はより顕著である。一次産品と（工業）製品という2大分類でみると、工業製品の比重が80年の22.6%から90年には50.8%に高まり、2001年には84.0%へと急上昇している。日中貿易は輸出入とも工業製品が大きな比重を占めるようになってきた。

80年代の後半から90年代の半ばにかけて輸入の比重が急上昇したのが繊維製品である。80年の12.3%から95年には34.4%となり、対中輸入の3分の1を占め、最大品目となっている。80年代後半からの日本の繊維企業の進出とその製品の逆輸入の増大が主要因である。しかし、繊維製品の輸入比重は01年には29.1%に低下している。日本の繊維製品輸入額全体に占める対中輸入のシェアは、80年の16.8%（2位）から90年25.0%（1位）、01年70.8%（1位）と推移し、

表2 日本の対中国輸出商品構成

| | 1980年 | | 1985年 | | 1990年 | | 1995年 | | 2000年 | | 2001年 | |
|---------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 |
| 輸出総額 | 50.78 | 100.0 | 124.77 | 100.0 | 61.30 | 100.0 | 219.31 | 100.0 | 303.38 | 100.0 | 309.41 | 100.0 |
| 食料品 | 0.01 | 0.0 | 0.20 | 0.2 | 0.25 | 0.4 | 0.93 | 0.4 | 1.39 | 0.5 | 1.64 | 0.5 |
| 原燃料 | 0.25 | 0.5 | 0.89 | 0.7 | 1.12 | 1.8 | 5.25 | 2.4 | 6.76 | 2.2 | 9.44 | 3.1 |
| 製品 | 49.92 | 98.3 | 122.31 | 98.0 | 59.01 | 96.3 | 209.85 | 95.7 | 295.23 | 97.3 | 298.34 | 96.4 |
| 繊維品 | 4.04 | 8.0 | 4.71 | 3.8 | 6.09 | 9.9 | 23.69 | 10.8 | 29.58 | 9.8 | 28.44 | 9.2 |
| 非金属鉱物製品 | | | | | 1.41 | 2.3 | 2.59 | 1.2 | 6.02 | 2.0 | 5.70 | 1.8 |
| 化学品 | 5.43 | 10.7 | 7.13 | 5.7 | 7.51 | 12.3 | 20.40 | 9.3 | 39.89 | 13.1 | 39.22 | 12.7 |
| 金属品 | 16.83 | 33.1 | 35.30 | 28.3 | 11.93 | 19.5 | 31.03 | 14.1 | 32.58 | 10.7 | 33.32 | 10.8 |
| 機械機器 | 21.47 | 42.3 | 71.06 | 57.0 | 28.34 | 46.2 | 122.44 | 55.8 | 166.57 | 54.9 | 169.94 | 54.9 |
| 一般機械 | 11.73 | 23.1 | 20.55 | 16.5 | 10.34 | 16.9 | 60.66 | 27.7 | 59.24 | 19.5 | 62.59 | 20.2 |
| 電気機械 | 4.84 | 9.5 | 25.76 | 20.6 | 13.71 | 22.4 | 48.06 | 21.9 | 83.36 | 27.5 | 81.30 | 26.3 |
| 輸送機械 | 4.15 | 8.2 | 22.01 | 17.6 | 3.14 | 5.1 | 9.41 | 4.3 | 11.75 | 3.9 | 13.20 | 4.3 |
| 精密機械 | 0.75 | 1.5 | 2.74 | 2.2 | 0.89 | 1.5 | 4.16 | 1.9 | 12.20 | 4.0 | 12.85 | 4.2 |
| その他 | 2.41 | 4.7 | 4.58 | 3.7 | 4.63 | 7.6 | 12.97 | 5.9 | | | | |

(注) 繊維品に繊維原料が含まれる。
(資料) 『通商白書』各年版より筆者作成

表3 日本の対中国国輸入商品構成

(単位：億ドル、%)

| | 1980年 | | 1985年 | | 1990年 | | 1995年 | | 2000年 | | 2001年 | |
|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 | 金額 | 構成比 |
| 輸入総額 | 43.23 | 100.0 | 64.83 | 100.0 | 120.54 | 100.0 | 359.22 | 100.0 | 551.16 | 100.0 | 577.86 | 100.0 |
| 食料品 | 4.71 | 10.9 | 9.35 | 14.4 | 19.35 | 16.1 | 47.04 | 13.1 | 58.71 | 10.7 | 59.13 | 10.2 |
| 原料品 | 5.00 | 11.6 | 8.27 | 12.8 | 10.87 | 9.0 | 13.55 | 3.8 | 14.94 | 2.7 | 13.12 | 2.3 |
| 鉱物性燃料 | 23.77 | 55.0 | 29.70 | 45.8 | 29.12 | 24.2 | 20.97 | 5.8 | 21.56 | 3.9 | 20.19 | 3.5 |
| 製品 | 9.76 | 22.6 | 17.51 | 27.0 | 61.20 | 50.8 | 277.66 | 77.3 | 455.87 | 82.7 | 485.37 | 84.0 |
| 化学品 | 1.98 | 4.6 | 3.02 | 4.7 | 6.52 | 5.4 | 13.33 | 3.7 | 16.38 | 3.0 | 17.11 | 3.0 |
| 機械機器 | | | | | 5.15 | 4.3 | 51.62 | 14.4 | 144.08 | 26.1 | 164.47 | 28.5 |
| 繊維製品 | 5.33 | 12.3 | 9.57 | 14.8 | 31.98 | 26.5 | 123.55 | 34.4 | 167.03 | 30.3 | 168.44 | 29.1 |
| 金属品 | 0.36 | 0.8 | | | 5.58 | 4.6 | 21.98 | 6.1 | 22.07 | 4.0 | 20.15 | 3.5 |
| 非金属鉱物品 | 0.40 | 0.9 | 0.23 | 0.4 | 1.56 | 1.3 | 7.69 | 2.1 | 10.91 | 2.0 | 11.54 | 2.0 |
| 雑製品 | | | 1.85 | 2.8 | | | 51.49 | 14.3 | 71.63 | 13.0 | 88.29 | 15.3 |
| その他 | | | | | | | 8.00 | 2.2 | 23.77 | 4.0 | 15.37 | 2.7 |

(注)1. 1980年の金属は鉄鋼(銹鉄)のみの数字。その他若干あるが多くない。

2. 2000年の雑製品は「家具」「旅行用具、ハンドバック」「玩具及び遊戯用具」「運動用具」「履き物」「プラスチック製品」「わら、竹、いくさ等の製品」「傘及び杖類」の合計。

3. 1995年の雑製品は「その他の製品」から「非金属鉱物製品」を除いたもの。

4. その他は製品輸入額から化学品、機械機器、繊維製品、金属品、非金属鉱物製品、雑製品を除いた額。
(資料)『通商白書』各年版より筆者作成

90年代半ば以降、繊維製品輸入の半分以上を中国が占めるようになっていく。数量ベースでみた中国のシェアはもっと高くなる。例えば、衣類の主要品目について金額ベースと数量ベースの中国のシェアを比較すると、男子用紳士服が75.6%と84.2%、女子用洋服が78.0%と90.3%、セーター類が81.0%と88.4%、ニット製下着類が79.3%と84.5%となっている(2000年)。このような状況は繊維製品以外の品目も同様である。(表4)

機械機器は79～81年の3年平均で対中輸入額のわずか0.4%しか占めなかったが、80年代に徐々に比重を高め、90年に4.3%に達した。90年代に入ると急増し始め、95年に14.4%、2001年に28.5%の比重を占めるようになり、繊維製品に次ぐ第2の輸入商品となっている。近年の輸入の急増傾向からみると、機械機器が繊維製品を上回って最大の輸入品となる時期は近い。日本の機械機器輸入額全体のなかでは、米国のシェア27.7%に次いで15.1%と2位に上昇している。機械機器の輸入も日本企業などの直接投資との関連が大きい。

日本の機械機器輸入額全体に占める中国の地位をより細かい分類でみる

と、2001年で一般機械では前年2位の台湾を上回り、米国に次いで2位、シェア12.0%である。電気機械は米国の25.6%に次いで2位、シェア19.4%であり、近年急速にシェアを伸ばしている。そのうち重電機器、音響機器、家庭用電気機器で1位、カラーテレビなどの映像機器はマレーシアに次いで2位である。半導体等電子部品は中国品の競争力がまだ弱い分野で7位、シェア3.6%であり、そのうちの集積回路も8位と順位は低い。しかし、個別半導体素子は米国に次いで2位に上昇している。電気計測機器は4位である。輸送機械全体でも3位となり、主要輸入相手国に入るようになり、船舶2位、自動車部品(車輪など)3位などの品目がある。精密機械は米国に次いで2位、シェア17.2%であり、そのうち写真機、複写機(部品を含む)は1位でシェアはそれぞれ40.8%、67.6%と高い。時計が2位、計測機器類(電気式除く)が3位となっている。

機械機器の輸出入でも水平分業化の進展は見られるが、細かく見ると同じ業種のなかでも日本からの輸出品は機能の高いもの、先進技術的なものが多く、中国からの輸入品は機能の低いも

表4 日本の輸入に占める中国品の地位の変化

A. 労働集約型製品

| | | 1980 | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 | 2001 | 上位5カ国 | |
|------------------|--------------|------|------|------------|------|------|------|----------------------------|--------------------------|
| 繊維製品 | 順位 シェア(%) | 16.8 | 24.6 | 25.0 | 50.3 | 68.1 | 70.8 | 中国、イタリア、韓国、 米国、ベトナム | |
| 衣類 | 順位 シェア(%) | 15.6 | 23.1 | 36.2 | 66.7 | 7 | 8.7 | 80.3 | 中国、イタリア、ベト ナム、フランス、米国 |
| 家具 | 順位 シェア(%) | 8.2 | 11.5 | (8) 4.6 | 20.7 | 28.7 | 34.5 | 中国、台湾、米国、タ イ、インドネシア | |
| 旅行用具・ハン ドバック等 | 順位 シェア(%) | … | … | 2.2 | 9.6 | 32.9 | 42.0 | 43.1 | 中国、イタリア、フラ ンス、米国、韓国 |
| 玩具・遊戯用具 | 順位 シェア(%) | … | … | 2.4 | 21.8 | 58.0 | 77.1 | 80.7 | 中国、米国、台湾、韓 国、タイ |
| 運動用具 | 順位 シェア(%) | … | … | 1.2 | 1.3 | 7.9 | 27.4 | 29.7 | 中国、米国、台湾、タ イ、韓国 |
| はき物 | 順位 シェア(%) | 5.5 | 9.1 | 12.2 | 46.8 | 64.9 | 66.1 | 中国、イタリア、韓国、 インドネシア、ベトナム | |

B. 機械機器

| | | 1980 | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 | 2001 | 上位5カ国 |
|---------|--------------|------|------|------|------|------|------|-------------------------------|
| ヘアドライヤー | 順位 シェア(%) | | | 34.7 | 47.8 | 56.7 | | |
| 電気アイロン | 順位 シェア(%) | | | 0.0 | 49.9 | 80.7 | | |
| 電気掃除機 | 順位 シェア(%) | | | 4.7 | 7.5 | 43.9 | 59.4 | 中国、韓国、マレーシ ア、米国、タイ |
| カラーテレビ | 順位 シェア(%) | | 0.4 | 1.3 | 8.4 | 24.8 | 34.0 | マレーシア、中国、インド ネシア、タイ、シンガポール |
| 電気冷蔵庫 | 順位 シェア(%) | | | 6.4 | 13.6 | 21.1 | 31.3 | 韓国、中国、インドネ シア、スウェーデン |
| 電気洗濯機 | 順位 シェア(%) | | | | 14.8 | 29.2 | | |
| 複写機 | 順位 シェア(%) | | | 0.0 | 39.2 | 71.9 | 67.6 | 中国、香港、米国、韓 国、タイ |
| 工作機械 | 順位 シェア(%) | … | … | … | … | … | … | 米国、ドイツ、スイス、 タイ、中国 |
| 集積回路 | 順位 シェア(%) | | | … | … | … | … | 米国、台湾、韓国、フ ィリピン、マレーシア |

(注) 順位、シェアは金額ベース。 はなし、… は小額で上位に入っていない。

01年に数字、国名が入ってないのは資料上に計上されていないため。

(資料) 『通商白書』(各年版)および『日本貿易月表』(各年12月)より筆者作成

の、成熟技術品が多い。例えば、工作機械の対中輸出は 310 億円、4,343 台で対中輸入は 35 億円、15 万 8,644 台である（2000 年）。中国に輸出される工作機械は、マシニングセンター、数値制御式の旋盤、研削盤などが多く、輸入される機械で数量が多いのは工具研削盤、金切り盤および切断機、ボール盤、研削盤（数値制御式以外のもの）で単価も数千円台である。工作機械全体の平均単価では対中輸出品が 714 万円、輸入品が 2 万円である。もっとも中国から輸入されている工作機械で金額が多いのはワイヤカット放電加工機で、この品目だけで 28 億円に上り、単価も 553 万円と各国からの輸入品と極端な差はない。（表 5）

また、工業製品の輸出入では日本からの部品・材料輸出と完成品・中間製品輸入というパターンもある。機械機器の直接投資や繊維製品の委託加工といった分野でこのような状況が見られる。中国全体の委託加工について中国の統計で見ると、輸出入に占める委託加工の輸出と輸入の割合は、2000 年でそれぞれ 16.5 % と 12.4 % となっている。また金額は 90 年の輸出 105 億ドル、輸入 87 億ドルから 2000 年にはそれぞれ 422 億ドル、289 億ドル

に増えている。この中に日本企業からの委託加工も含まれている。なお、コスト競争力強化のためには日本からの高価な部品、材料の調達是不利となるため、90 年代前半の円高以降日本からの調達は減少傾向にあったが、近年一層のコスト削減に迫られているのでさらに減少するとみられる。

雑製品（家具、旅行用具・ハンドバッグ類、プラスチック製品、玩具・遊戯用具、はき物、運動用具など）も対中輸入の主要品目となっている。雑製品は 85 年に対中輸入額の 2.8 % しか占めていなかったが、01 年には 15.3 % を占め、繊維製品、機械機器に次ぐ第 3 位の製品である。日本の雑製品輸入額全体に占める中国の地位は 85 年で 6 位、シェア 5.9 % にすぎなかったが 90 年代に上昇し、95 年 1 位、同 23.2 %、2001 年 1 位、同 39.6 % へと高まっている。前述の個別品目ではすべて中国が 1 位であり、シェアも玩具・遊戯用具 80.7 %、はき物 66.1 %、旅行用具・ハンドバッグ類 43.1 %、プラスチック製品 38.9 %、家具 34.5 %、運動用具 29.7 % と高いし、年々シェアは上昇している。

以前から主要商品の 1 つであった食料品は 90 年代初めまで繊維製品に

表5 日本の機械輸入に占める中国の地位

| | 1995年 | | 2000年 | | 2001年 | | 輸入先上位5カ国 |
|-----------|-------|---------|-------|---------|-------|---------|---------------------------|
| | 順位 | シェア (%) | 順位 | シェア (%) | 順位 | シェア (%) | |
| 機械機器 | | 6.1 | | 12.0 | | 15.1 | 米国 中国 台湾 ドイツ 韓国 |
| 一般機械 | | 3.4 | | 9.1 | | 12.0 | 米国 中国 台湾 韓国 シンガポール |
| 原動機 | | | | 1.9 | | 1.9 | 米国 英国 フランス ドイツ 中国 |
| 事務用機械 | | | | 10.0 | | 14.1 | 米国 台湾 中国 シンガポール 韓国 |
| コンピュータ | | | | 9.5 | | 13.6 | 米国 台湾 中国 シンガポール 韓国 |
| 入出力装置 | | | | 20.5 | | 30.6 | 中国 台湾 韓国 タイ フィリピン |
| 金属加工機械 | | | | 4.8 | | 54.0 | 米国 ドイツ スイス 中国 韓国 |
| 建設・鉱山用機械 | | | | 10.1 | | 13.8 | 米国 中国 ドイツ 韓国 インドネシア |
| 加熱・冷却用機械 | | 3.7 | | 14.1 | | 22.5 | 米国 中国 タイ ドイツ マレーシア |
| ポンプ・遠心分離機 | | | | 10.1 | | 11.2 | 米国 中国 ドイツ タイ 台湾 |
| 荷役機械 | | | | 17.6 | | 19.4 | 中国 米国 ドイツ 韓国 フランス |
| 軸受 | | | | 22.3 | | 19.3 | 米国 中国 タイ シンガポール ドイツ |
| 変速機・歯車類 | | | | 15.3 | | 17.0 | 米国 中国 ドイツ 韓国 英国 |
| 電気機械 | | 9.5 | | 15.5 | | 19.4 | 米国 中国 韓国 マレーシア 台湾 |
| 重電機器 | | 35.2 | | 46.1 | | 45.2 | 中国 米国 タイ 台湾 インドネシア |
| 電気回路用品 | | | | 31.5 | | 33.8 | 中国 米国 台湾 タイ フィリピン |
| 映像機器 | | | | 23.9 | | 33.1 | 中国 中国 インドネシア タイ 韓国 |
| カラーテレビ | | | | 24.0 | | 34.0 | マレーシア 中国 インドネシア タイ シンガポール |
| 音響機器 | | 26.0 | | 41.8 | | 36.4 | 中国 マレーシア 米国 フィリピン 韓国 |
| 映像・音響機器部品 | | 18.2 | | 30.6 | | 43.7 | 中国 米国 韓国 マレーシア タイ |
| 通信機器 | | 6.4 | | 5.2 | | 11.9 | 米国 中国 スウェーデン タイ 台湾 |
| 家庭用電気機器 | | | | 37.8 | | 43.0 | 中国 タイ 韓国 ドイツ 台湾 |
| 半導体等電子部品 | | | | | | 3.6 | 米国 タイ 韓国 マレーシア フィリピン |
| 個別半導体素子 | | | | 10.8 | | 12.9 | 米国 中国 タイ マレーシア フィリピン |
| 集積回路 | | | | 2.0 | | 2.4 | 米国 タイ 韓国 フィリピン マレーシア |
| 電気計測機器 | | | | 2.4 | | 2.5 | 米国 ドイツ 英国 中国 スイス |
| 輸送機械 | | 1.5 | | 4.3 | | 5.6 | ドイツ 米国 中国 英国 スウェーデン |
| 自動車部品 | | | | 7.5 | | 8.2 | 米国 ドイツ 中国 タイ 台湾 |
| 精密機械 | | 10.8 | | 15.8 | | 17.2 | 米国 中国 スイス アイルランド ドイツ |
| 写真機 | | | | 45.2 | | 40.8 | 中国 タイ マレーシア 台湾 インドネシア |
| 計測機器類 | | 3.9 | | 6.0 | | 8.2 | 米国 ドイツ 中国 英国 スイス |
| 複写機(部品含む) | | | | 52.5 | | 67.6 | 中国 香港 米国 韓国 タイ |
| 時計 | | 17.5 | | 22.9 | | 21.5 | スイス 中国 香港 タイ 韓国 |

(注) 数値が入ってないところは5位以内に入っていないため。多くの品目で5位以内しか計上されていない。

(資料)『通商白書』各年版より筆者作成

次ぐ第 2 位の位置にあったが、その後 4 位に後退している。食料品のなかでは魚介類や野菜類の輸入が多い。主要品目のなかでの最大の変化は原油の比重低下である。80 年 42.1 %、85 年 33.9 % を占めていたが、2001 年には 1.8 % まで低下した。中国の原油生産の停滞、国内需要の増大を反映している。

(4) 貿易摩擦の増加

中国からの輸入が急増しているため貿易摩擦も顕在化するようになった。2001 年にはしいたけ、ねぎ、蕎麦の農産物 3 品目について緊急セーフガードが発動された。これに対して中国は対抗措置を取り、自動車、携帯電話、エアコンについて高率の関税を課した。その後の日中間の協議によりこれら 3 品目の緊急セーフガードは 6 カ月間だけ実施され、本格発動は最終的には見合わされた。

農産物以外にはタオル、ネクタイなど中国からの輸入が急増している工業製品についても当該業界からは輸入制限の要請が出されている。タオルについては発動すべきか否か実態調査が行われたが、緊急政府ガードの発動には至らず、引き続き調査を続けることに

なっている。

中国側からは、以前から日本製品に対して時々アンチダンピング措置が適用されている。01 年には日本製鉄鋼製品に暫定セーフガードが発動された。

対中投資が主な変化要因

日中貿易を変化させてきた要因は、対中投資の増加と逆輸入、日系企業・その他の外資系企業・中国地場企業が生産する中国製品の競争力向上という要因のほか、中国の直接投資導入政策、輸出拡大政策や日本側の円高要因といった経済政策・環境および近年の日本における需要の低価格志向と在日本企業のコスト競争力の低下などがある。

(1) 対中投資（企業進出）と逆輸入の増加

日本の対中投資が始まったのは、中国が外国企業の投資受け入れのため合弁企業法を制定した 1979 年以降のことである。日本側統計によると、当初少なかった投資は 84 ~ 85 年の第 1 次対中投資ブーム期には 1 億ドル台、85 年度には件数が 100 件を超えた。87 年から 89 年春にかけて第 2 次投資ブームとなり、3 ~ 4 億ドル台に増

えた(87年度は例外)、92～95年には第3次の投資ブームとなり、95年度の対中投資は件数770件、金額44億7,800万ドルのピークとなった。90年代後半には対中投資は減少し、99年度のコストは91年度を若干上回る水準まで低下した。2000年から第4次の対中投資ブームとなり、01年には14億8,300万ドル、前年比64.0%増となっている。なお、中国側統計(実行ベース)によると、日本からの投資は01年の年間で43億4,800万ドルとなり、過去最高の97年の金額を上回っている。

90年代に入ってからからの日本の対中投資の変化ないし特徴として挙げられるのは、日本の対外投資の中で中国は主要な投資先となってきた、製造業の投資が本格化した、中国国内市場をターゲットとする投資が増えた、既進出企業の拡張投資が増えた、などである。2000年以降の対中投資の特徴としては、低コスト生産を目的としている、比較的新しい製品を投入している、研究・開発部門、調達部門を設置している、投資に際して国内工場の閉鎖・縮小を伴う例が増えている、などである。

今年2月、経済産業省が467事業

所を対象に行った、3年間(過去2年と今後1年)の海外移転等に関するアンケート調査によれば、業種別では電気機械を中心とする機械機器関連が3分の2を占め、海外移転等の主な理由は、コスト競争の激化(6割)、現地市場開拓(2割)となっている。海外移転先は中国が46%と圧倒的に多く、アジア全体が82%に達する。海外移転に伴い生産の削減や解雇・他工場への配置転換など雇用への影響も表れている。なお、財務省への対外投資届出統計による業種別の近年の特徴を見ると製造業が圧倒的に多く、電気機械を中心に輸送機械、一般機械を含めて機械機器が全体の58.8%、製造業の66.6%を占めている(01年度)。化学や金属の投資も多い。非製造業ではサービス業や商業の投資が多い。

以上のような日本からの対中投資が拡大する中で、進出企業製品の日本への逆輸入が増えるようになった。統計上把握できるのは1995年度からであるが、同年の日系製造業企業の日本向け輸出1,822億円に対し、99年度には5,041億円と2.8倍の増加となっている。なお、中国の輸出の中で外資系企業の輸出が果たす役割が大きくなっている。中国の輸出総額に占め

る外資系企業の輸出は、外国からの投資が少なかった 80 年には 800 万ドル、0.0 % にすぎなかったが、90 年に 78 億ドル、12.6 %、2000 年に 1,194 億ドル、47.9 % へと約 5 割を占めるようになり、01 年には 1,332 億ドル、50.1 % と初めて 5 割を超えた。電子工業製品（一部家電を含む）の場合はさらに外資系企業（香港・台湾・マカオ系企業含む）の輸出の割合が高く、99 年で 73.9 % となっている。

（2）委託加工の増加と同製品の輸入

日本側には委託加工の統計はないが、中国側には輸出入全体の貿易方式別の統計が公表されている。ただし国別の統計は公表されていない。中国の委託（受託）加工貿易は有力な貿易方式として改革・開放と同時期に推進され始め、大きな成果を挙げてきた。80 年代には珠江デルタで多く行われ、90 年代には各地に保税區が設けられるようになった。85 年当時多かった委託加工輸出品は衣類・同半製品を中心に雑製品、機械電気製品、玩具、繊維系・織物、旅行用具などであった。90 年時点では最大の委託加工輸出品は機械電気製品となり、次いで衣類、繊維系・織物、雑製品、玩具、旅行用

具、靴などが多かった。機械電気製品では機器・計測器・工具類、音響・映像機器の伸びが大きかった。90 年代に入ると中国の統計分類に変更があり、公表資料では品目別の動向は把握できなくなったが、90 年当時の状況が持続、拡大していったとみられる。

2001 年の委託加工輸出額は 422 億ドルで輸出総額の 15.9 % を占めている。90 年が 16.8 % であったから若干の比重低下程度である。金額的には 90 年の 4.0 倍に増えている。対日委託加工輸出額は分からないが、衣類などの繊維製品や電子機器などでは相当の規模で行われているとみられる。例えば、ファーストリテイリング（ユニクロ）はほとんど委託加工方式といわれるし、電子部品の企業で珠江デルタで委託加工をやっているところも多い。中国の EMS（電子機器受託製造サービス）企業が委託加工方式でやっている可能性もある。委託加工方式は、委託する企業からみれば直接投資と比べ所要資金は少なくすむ、需要の変動に柔軟に対応できるなどのメリットがある。

（3）中国品の競争力向上

中国品の競争力向上は、輸入に占める中国品シェアの上昇、中国品輸入浸

透度上昇に反映されているといえるが、競争力そのものは価格の安さにも示されている。機械機器個別品目の単価を比較すると、ヘアドライヤ、電気アイロン、電気掃除機といった品目や工作機械、集積回路では中国品の単価は断然安い。冷蔵庫もかなり安価である。しかし、カラーテレビとなると東南アジア製とほぼ同じとなり、洗濯機、複写機は逆に高くなっている。これらの製品の中には日系企業製品、韓国、台湾など日本以外の外資系企業製品、中国地場企業製品が含まれている。

(4) 経済政策・経済環境

(i) 中国側における直接投資プル要因

中国は1970年代末に直接投資を導入する政策に転換し、79年には合弁企業法を制定した。以来、外国企業を誘致するため優遇税制措置を講じたり、深圳などの経済特別区や経済技術開発区、上海浦東新区などの整備を行った。国内の経済改革も推進した。このような改革・開放政策が効を奏し、中国経済は高度成長を遂げるようになった。中国が2ケタの高成長を記録したのは1983～85年、87～88年、92～95年の3期あるが、この時期は改革・開放が進展した時期と重な

り、対中投資ブームとなった時期とも重なる。中国の市場開放政策と中国市場自体の高成長が外資を誘因する要因となった。

2000年からの第4期の対中投資ブームも基本的には前3期の対中投資ブームと同様の要因による。改革・開放の進展という点では99年11月に米国との間で中国のWTO加盟に関する交渉が合意をみたことが大きい。米中間の交渉合意は加盟の正式実現ではないが、加盟実現は時間の問題となってきたこと、合意の内容からみて中国市場の開放が大きく進むとみられたこと、が対中投資を促す契機となった。さらに中国市場の成長という点では、1997年のアジア通貨・金融危機の影響などで90年代末東アジア諸国を中心に経済不振となり、低成長ないしマイナス成長に陥った。他方、中国は以前の高成長と比べれば成長率は落ちたし、98～99年にはデフレ経済化という改革・開放以来初めての状況に見舞われたが、国際的にみれば7～8%台という高い成長を維持した。

国際協力銀行が毎年行っているアンケート調査では、93年以来3年程度の中期でみても10年程度の長期でみても有望投資先のトップは中国となっ

ていた。2001年の調査も同様の結果となっているが、中期的（今後3年程度）に海外事業展開を強化・拡大する理由で、中国の場合、回答数が最も多かったのは「市場拡大への対応」となっており、次いで「低廉な労働力確保による競争力強化」「得意先への柔軟な部品供給体制の構築」「低廉な原材料等確保による競争力強化」となっている。

(ii) 日本側における直接投資プッシュ要因

日本企業が対中投資を行う要因は、上記の中国側におけるプル要因に加えて90年代半ばまでは円高という要因が大きかった。近年は中国のWTO加盟を契機とする改革・開放の進展、高成長・市場拡大といった要因に加えて日本でのコスト面における競争力の低下が重要な要因になっている。

80年代から90年代半ばにかけては円高による日本製品の国際競争力の低下で、日本企業は生産拠点を東アジア諸国に移さざるを得なくなった。1985年のプラザ合意後87年にかけて1ドル=240円程度から120円程度へと急激に円高が進んだ。このため日本企業は大挙して生産拠点の海外移

転を始めるようになった。ただし、当時の投資先はアジアNIES、ASEANが中心であり、中国への投資も増えたがそれほど多くはなかった。

93年から95年にかけて再び円高が進んだ。95年4月には一時期1ドル=79円台にまで上昇した。再び生産拠点の移転が加速されるようになり、高成長し市場開放を進めている中国が注目され、開発途上国向け投資は大挙して中国に向かった。中国が東アジア各国のなかで最大の投資先になったのはこの時期である。

2000年以降の第4次の対中投資ブームは以前とは異なり、円高ではない時期のブームである。WTO加盟、市場の持続的成長・拡大という中国側のプル要因が大きいのが、それだけでなくグローバル化の進展のなかで米国企業などのSCM（サプライチェーンマネジメント）といった新しいビジネスモデルの採用、EMS企業の台頭、日本における需要の良質・安価品志向とこれに対応する企業の出現（例えばファーストリテイリング）などで内外市場における競争が激化している。このなかで旧来型ビジネスモデルと高コスト構造下での日本企業のコスト競争力は低下した。日本の国内市場において

は日系企業の逆輸入品を含む各国からの輸入品に対抗できなくなっている商品が増えている。輸出市場においても競争力が落ちている。コスト削減による競争力向上を目指した対中投資が増えているのにはこのような背景がある。

(iii) 中国の輸出拡大政策

中国は改革・開放以来、輸出拡大に直接・間接つなげる政策を数多くとってきた。1970年代末から90年代半ばにかけては、数次にわたる為替レートの切り下げ、直接投資の導入、貿易企業の増加、外貨留保制度の実施、輸出金融、輸出振興税制、その他の輸出奨励策であった。アジア通貨・金融危機があった97年以降には付加価値税(増値税)の早期還付、同還付率の引き上げ(98年以降)、輸出金融の拡充、貿易企業の増加、輸出保険の実施などが輸出を維持する主な政策となった。これら諸施策のなかで輸出拡大にとって最も重要かつ効果が大きかったのは人民元レートの切り下げであった。

若干の展望

既述のように80年代後半、90年代前半の対中投資ブームがその後の日中

貿易を大きく変化させてきた。今回の対中投資ブームにより3年後、5年後の日中貿易はさらに大きく変化することになる。中国からの輸入は増えつづけ、貿易不均衡、日本の赤字はさらに拡大する。中国品ばかりではなくその他の東アジア各国からの製品輸入も増大する。日本製品の中で国際競争力が最も強かった機械機器の分野についての動向を以下に見てみよう。

表6は日本における機械機器輸入浸透度、表7は日本の機械機器の貿易特化係数である。いずれも国際競争力を反映する指標である。輸入浸透度は国内需要全体(生産+輸入-輸出)に占める輸入の割合を示すもので、その比率が高いほど輸入品の役割が大きいことを示す。1985年9月のプラザ合意後、大幅な円高が進むようになるが、85年の輸入浸透度は機械機器全体で見ても個別品目で見てもほとんどが10%前後と極めて低い。これが2000年には機械機器全体で約3割に達し、テレビ、テープレコーダー、これら部品などを含む音響映像機器では6割、コンピュータと周辺機器を主体とする事務用機器では5割強、コンピュータ部品などが中心の半導体等電子部品が4割に達している。85年当

時と比べ上昇していないのは輸送機械ぐらいである。各国製品のなかで輸入浸透度が高くなっているのが中国品である。

貿易特化係数は当該品目の（輸出額 - 輸入額）を（輸出額 + 輸入額）で割ったものであり、輸入がなく輸出だけを行っていけば 1.0、逆に輸出がなく輸入だけを行っている場合は - 1.0 になる。円高が進む以前の 1980、85 年の数値は機械機器全体で 0.8、音響映像機器は 1.0、通信機器、家電機器、輸送機器は 0.9 とほとんど輸入がなかったことを示している。日本製機械機器の国際競争力が圧倒的に強かった時期である。それが度重なる急激な円高を背景に徐々に競争力を失っていく。家電機器は 95 年時点で - 0.1 と輸出より輸入が多くなり、01 年には - 0.5 とさらに輸入が増大している。01 年の事務用機器は 0.0 で輸出入が均衡化し、音響映像機器、通信機器、半導体等電子部品や電気機械全体でも輸入が増えていることを示している。IT 時代の代表的製品であるコンピュータ関連の事務用機器、半導体等電子部品、通信機器などの競争力が低下していることは問題である。貿易特化係数でも 85 年当時と大差ない数値を示し、競争

力を維持しているのは輸送機械である。

今後の日本の機械機器の輸出入は、近年の中国向け投資の増加傾向からみると 1990 年代の傾向をさらに加速することになるとみられる。このままでいけば機械機器の多くの業種で家電機器のように輸出より輸入が圧倒的に多くなりかねないのである。

近年の対中投資ブームのなかで日本の多くの企業は生産拠点などを中国に設立している。90 年代前半までの投資と異なる点は対外投資にあたって国内の工場を閉鎖ないし縮小する企業が増えていることである。このため日本の産業空洞化、雇用への影響が懸念されている。このことは既述の経済産業省のアンケート調査に表れているし、新聞報道などでも伝えられている。個別企業の立場では、成長する中国市場でのビジネスチャンスを見逃すべきではないだろうし、国際競争で生き残るためにもコスト競争力強化のための対中投資は欠かせないだろう。しかし、日本という国全体の競争力という視点から見れば、さらなる競争力低下は問題であろう。今年 5 月、政府は産業競争力戦略会議を開き、「競争力強化のための 6 つの戦略」という中間とりまとめを行っている。そのなかで日本

表6 日本の機械機器輸入浸透度の変化
(単位: %)

| | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 |
|----------|------|------|------|-------|
| 機械機器 | 8.6 | 12.1 | 18.7 | 29.3 |
| 一般機械 | 13.1 | 15.6 | 25.7 | 39.3 |
| 事務用機器 | 14.7 | 18.0 | 35.7 | 52.0 |
| 電気機械 | 8.5 | 11.5 | 20.6 | 32.2 |
| 電気回路用品 | 4.4 | 5.2 | 7.7 | 12.7 |
| 音響映像機器 | 4.4 | 19.8 | 50.0 | 60.1 |
| 通信機器 | 9.2 | 5.6 | 10.7 | 14.5 |
| 家電機器 | 1.7 | 4.4 | 7.0 | 10.5 |
| 半導体等電子部品 | 10.9 | 15.7 | 32.8 | 40.6 |
| 電気計測機器 | 30.3 | 45.7 | 63.1 | 127.6 |
| 輸送機械 | 7.1 | 8.6 | 9.3 | 10.1 |

- (注)1. 輸入浸透度は

$$\frac{\text{輸入額}}{\text{生産額} + \text{輸入額} - \text{輸出額}} \times 100$$
2. 1985、1990年の輸出額はドルで示されているので、円換算して計算。
3. 『機械統計年報』と『通商白書』で統計の分類が相違する点は『通商白書』の分類に合わせて調整。例えば、コンピュータは『機械統計年報』では電気機械に入っているが『通商白書』では一般機械の事務用機器に入っている。しかし、調整は主要な品目のみであり、十分に調整されていない。
4. 『通商白書(各論)』の1985年版では音響映像機器は通信機器の項に入っているので1990年以降に合わせて調整。

(資料) 生産額は経済産業省(旧通商産業省)『機械統計年報』(各年版)、輸出額・輸入額は同『通商白書(各論)』(各年版)の数値を使用

表7 日本の機械機器の貿易特化係数
(単位: %)

| | 1980 | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 | 2001 |
|----------|------|------|------|------|------|------|
| 機械機器 | 0.8 | 0.8 | 0.7 | 0.6 | 0.5 | 0.5 |
| 一般機械 | 0.7 | 0.7 | 0.6 | 0.6 | 0.4 | 0.4 |
| 事務用機器 | 0.4 | 0.7 | 0.6 | 0.3 | 0.0 | 0.0 |
| 電気機械 | 0.8 | 0.8 | 0.7 | 0.5 | 0.4 | 0.3 |
| 電気回路用品 | 0.7 | 0.7 | 0.7 | 0.7 | 0.6 | 0.6 |
| 音響映像機器 | 1.0 | 1.0 | 0.9 | 0.6 | 0.3 | 0.2 |
| 通信機器 | 0.9 | 0.9 | 0.8 | 0.4 | 0.2 | 0.2 |
| 家電機器 | 0.9 | 0.9 | 0.4 | 0.1 | 0.4 | 0.5 |
| 半導体等電子部品 | 0.5 | 0.6 | 0.6 | 0.5 | 0.4 | 0.3 |
| 電気計測機器 | 0.0 | 0.3 | 0.2 | 0.4 | 0.4 | 0.3 |
| 輸送機械 | 0.9 | 0.9 | 0.7 | 0.7 | 0.8 | 0.8 |
| 精密機械 | 0.7 | 0.8 | 0.6 | 0.5 | 0.4 | 0.3 |

- (注) 特化係数は

$$\frac{\text{輸出額} - \text{輸入額}}{\text{輸出額} + \text{輸入額}}$$
- (資料) 『通商白書』各年版から作成

の産業競争力低下の原因を分析し、企業、政府双方に問題があったことを指摘している。グローバル化が進んでい

る現在ではスピードのある対応を行わないと手遅れになりかねない。日本の産業競争力の早期強化が必要である。